

令和6年度 学校評価表

品川区立台場小学校

校長 滝淵 正史

台場小学校校区教育協働委員会

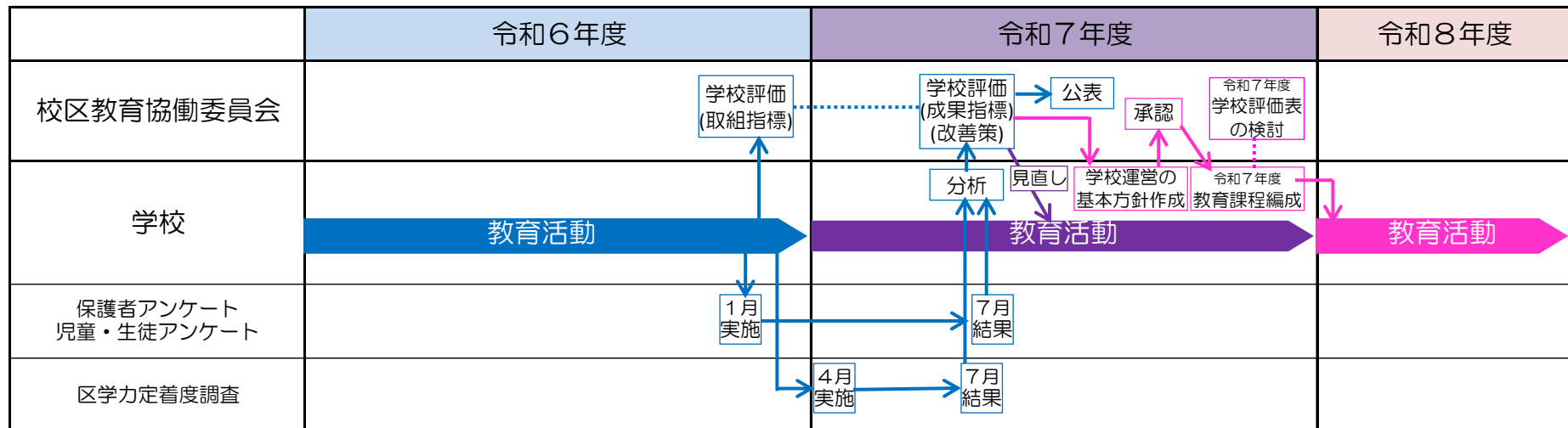
委員長 酒井 朗

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和6年度の学校評価が令和7年度および令和8年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		○各教科の学習内容で、基礎基本となる知識や技能の定着を図る。 ○自ら学ぼうとする意欲・学習態度を大切にして、主体的で対話的な深い学びの実現を図る。 ○教師の指導力の向上を図る。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	区学力定着度調査では、全学年各教科の目標値を90%以上、上回るようにする	多くの教科や学年で目標値を上回った。	A	○ 学力定着度調査では多くの学年・教科で目標値90%を上回り、少人数指導や授業のユニバーサルデザイン化、朝の帯学習といった取組の成果が現れたといえる。一方で、児童の個人差や高学年での学習時間確保の難しさといった課題が見られた。 → 今後は、行事の精選等により、授業時間を確保した上で、個別最適な学びと協働的な学びを推進したり、合理的配慮を含めた個別支援の強化を行ったりし、全児童の学力向上と学習意欲の向上につなげていく。
	少人数・複数指導体制、丁寧な見取りと適正な評価によるきめ細かな指導を進める	特別支援での個別指導が有効な児童が多く、特別支援担当と学級担任が情報を共有しながら、きめ細やかな指導ができた。複数指導体制では、学年で取り組む授業や行事を通して児童の様子を見取り、共有できた。少人数算数では、人手が少なく十分な指導や見取りができたとは言えなかった。	B	
	授業のユニバーサルデザイン化(焦点化・視覚化・共有化・しかけ・展開の構造化)により、考え続ける授業を目指す	学校全体で共通認識をもって、ユニバーサルデザイン化に取り組むことができていた。個別最適な学びを取り入れて、児童が自分にあった学習スタイルを取り入れて、主体的に考える取組方を育てることができた。	A	
	サントレ・視写・暗誦・作文・スピーチなどに朝の帯学習で取り組み、言葉の力を高める	朝の帯学習で、漢字や語彙、言葉の力の育成を図ることができた。ルーティン化することで、子どもたちが集中して取り組むことができた。行事等で学習時間の確保ができない時もあった。	B	
②	各学年、「好きな教科や授業がある」と回答する児童をクラスの90%以上とする。	どの学年も90%越えた。	A	○ 多くの児童が好きな教科をもっており、意欲的、主体的に学習に取り組む姿が見られる。一方で、苦手意識から学習意欲が低く、授業に参加できていない児童もいることが課題である。 → 児童の「できた」「わかった」という成功体験を積ませるための授業改善や、ICTや視覚・聴覚教材の活用を進めて個々に応じた学びの環境を整える必要がある。
	「学習の準備」「姿勢」「聞き方や発表の仕方」など、台場スタンダードを徹底する	全教職員が共通認識をもって、台場スタンダードを徹底して行うことができた。低学年や特別支援学級では特に、視覚化することで意識づけができた。	A	
	どの児童にも分かる授業を目指し、明確な指示や発問、板書などの工夫を進める	授業の流れを分かりやすく示したり、めあてを明確化したり、板書や発問を工夫したりすることができた。	A	
	情報収集、整理分析、まとめ、表現、考えの共有・比較、合意形成などの力を育てる	ICT機器を効果的に使うことができた。友達の考えに触れる機会が増え、楽しく学習することができたが、考えを深めたり、定着させたりするところまでは至らなかった。	B	
③	教材研究、研修の充実や通級指導教室などとの連携を図る	通級指導教室との連携や情報共有は進んだが、教材研究の時間確保や効率的な研修の進め方に課題があった。	B	○ 教材研究や研修、通級指導教室との連携については、OJTの推進や授業見合いによる成果がある一方、行事準備の多さや時間不足により、十分な話し合いや教材共有が難しいという課題が見られる。 → 行事の精選や勤務時間内で効率的に話し合う仕組み作り、計画的な研修の実施、ICTを活用するスキルの差を埋めるための校内研修の強化などを通じて、全体で連携を深め、指導の質の向上を図っていくことが求められる。
	ベテラン教員が教材分析、タブレットの活用の共有やOJT研修を推進する	教員全体で、よりよい指導を目指してOJT研修を推進できた。計画的に研修を行うことができ、具体的な内容であったり、実際の指導場面を参観できたりして、有意義にすすめることができた。	A	
	アセスメントおよび読み書き障害などに対応したドリルやソフト(東京ベーシックドリル、区学テ補助教材、eライブラリ、MARUGLAND)を有効に活用する (特別支援教室・通級指導教員は、MIMトレーニングなどの使用が可能。)	児童の学習状況や特性に合わせて、教材を活用することができた。取り組み方の習慣をつけることができ、児童が学習時間を有効に使えるようになった。教科によって、また、ソフトによっては、活用できていない部分もあった。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		○家庭、地域、保育園・幼稚園、連携学校などと連携し、規範意識の醸成と基本的な生活習慣の定着を図る ○各教科や市民科、学校行事、保幼小交流活動、日常生活の中で、人権尊重教育を通して、自他共に大切にし、相互に認め合える態度や能力を育て、支持的風土を構築する ○豊かな国際感覚を身に付けて、共生共助社会の実現を目指そうとする態度や能力を育てる		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	学習規律・生活規律を守ることを、全児童の90%が意識して、主体的に学校生活を送る	多くの児童が規律を意識して生活していたが、主体性や挨拶などに個人差が見られ、課題も残った。	B	○学習・生活規律の意識は朝会や週目標などを通じて高まりつつあるが、主体性やあいさつの定着には課題が残る。別室登校や支援が必要な児童への対応、個人ごとのルール設定の難しさもある。 →児童会活動等において児童が考えて行動できるような指導を重視し、あいさつや主体的に活動する学校の風土を醸成していく。また、個別支援を充実させ、全職員での共通理解のもと、規律意識のさらなる向上を目指す必要がある。
	時間を守る、あいさつや返事、丁寧な言葉遣い、家庭学習・読書などの定着を図る	週目標として意識付けしたり、市民科で取り上げたりすることで定着を図ることができた。教員が率先して行うことで、あいさつや時間を守ることが習慣化されてきた。家庭学習・読書については、学校で共通の取組カードなどを活用し、定着させることができた。	A	
②	人権に係る知識や態度を身に付け、自己を大切にするとともに、友達などに優しく接する	人権意識は育ってきており優しく接する児童も多いが、定着や自己肯定感には個人差があり継続指導が必要である。	B	○人権に関する知識や態度は多くの児童に身に付きつつあるが、行動・態度面での実践には課題が残る。また、自分優先の行動、感情コントロールの難しさが見られる児童もいる。 →ソーシャルスキルトレーニングや日常生活での振り返りを通じて実践力を育てるとともに、教員間で共通理解を図り、特別な支援が必要な児童への対応を工夫することが求められる。また、教員自身の人権感覚を高める研修の継続も重要である。
	人権教育指導計画に基づいて、普遍的、個別的な視点からの取組を充実させる	校内研究で人権学習を行うことで、学校全体で、普遍的、個別的な視点からの取組を充実させることができた。毎月の人権DAYで意識付けができていたが、十分に指導できていない時もあった。	B	
	命に係る取組を年間指導計画に位置付け、命の尊さを考え、命を守る態度を育てる	命の授業、いじめの授業、赤ちゃん交流など計画的に行うことで、児童が自分と結び付けて考え、命を守る態度が育った。保健指導や道徳的な心情を育てる学習は継続して行う必要がある。	B	
	縦割り班活動・清掃における交流を通して、自己有用感を高める	計画的に、そして継続的に取組を重ねることで、児童は自分の居場所を広げたり、責任感や自己有用感を高めたりすることができた。下級生は次年度の自分の役割や取組がイメージでき、期待をもって活動に参加できていた。	A	
③	日本や世界にも目を向け、多様性を尊重し、課題を解決しようとする姿勢を育てる	地域や世界に目を向ける活動を通して多様性を尊重する姿勢は育ってきたが、課題解決には今後の継続が必要である。	A	○多様性への理解や課題解決への意識は高まりつつあるが、問題解決の力が十分についていない。そのために、低学年からの系統的な指導が必要である。また、児童の視野をさらに広げるために、興味関心を引く題材の設定など指導の工夫が必要である。 →学年に応じた継続的な取組を通して、主体的に課題に向き合い多様性を尊重する姿勢を育てていくことが重要である。
	地域や日本の伝統文化に触れ、その良さを発信する能力や態度を育てる	町探検や東海道歴史探訪、江戸切子や箏など、日本の伝統文化が溢れる町の地の利を生かして、その良さを体験的に学び、発信することができた。	A	
	「住み続けられるまちづくり」や「海の豊かさを守ろう」に取り組み、安全で、安心して、大切なものが守られる社会を自らつくり出していくという意識や能力を身に付けさせる	熟議や海洋学習、地域行事への参加を通して、地域のよさに気づき、自分たちでできることを考え提案することができた。また、地域の方の学校に対する理解と協力があり、児童が自分事として考え、実践しようという意識を高めることができた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		○体育、健康教育全体計画に沿って、体育科における授業の充実を図る ○運動の習慣化や健康意識の向上を図る ○安全指導計画に沿って、交通事故や災害、不審者対応などの様々な危機を想定しての安全指導や体験的な訓練を行い、命を自ら守ろうとする態度や知識、技能を身に付けさせる ○個に応じたアレルギー対応を適切に行い、未然防止に努める		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	全ての児童が、「わかった」「できた」喜びを味わい、運動の意欲が高まるようにする	特別授業等の活用で児童の興味関心は高まり、運動意欲も向上しているが、個人差が大きく、全員が「わかった」「できた」と感じているわけではない。	B	○ 運動への意欲や「わかった」「できた」の喜びは一部で見られるが、指導力の差や教材・場の工夫不足、児童の個人差が課題となっている。苦手意識や体幹の弱さなども意欲低下につながっており、活動内容の事前共有や個別の目標設定、通級での体幹トレーニングの活用が必要である。 → 体育指導のOJTや教材の管理・整備を進め、すべての児童が運動に前向きに取り組める環境づくりが必要である。
	常に自分なりのめあてを意識して取り組めるよう、場の工夫やTAの有効な活用を図る	毎時間めあての設定と振り返りや、場の工夫を行った。体育部教員からのカードを活用した。テクニカル・アドバイザーの活用が十分にできていない。	B	
	オリンピックやパラリンピアンを招いた体験学習や講演会を全学年において実施する	デフリンピックに向け、アスリートによる体験的な授業を行ったり「しゅわしゅわデフリンピック」をみんなで踊ったりしたことで児童の関心が高まった。	A	
②	東京都統一体力テストで、5割以上の種目が区の平均以上である	低学年は多くの種目で区平均を上回るが、高学年では達成が難しく、特に男子は多くの種目で平均以下となっている。全体的に目標達成は困難で、練習量や運動知識の不足が課題である。	B	○ 握力・上体起こし・長座体前屈・ソフトボール投げなど特定の種目で都平均を下回った。冬の体力向上週間やチャレンジジャンプなどの取組は、反復横跳びやシャトルラン等の成果につながっている。 → 基礎体力を高める準備運動や体幹トレーニング、体育授業や休み時間での継続的な運動習慣づくりが求められる。
	一校一取組、体力向上月間、スポーツトライアル、ワンミニッツで、自己・学級目標を設定し、達成感を味わえるようにする	チャレンジジャンプでは学級の目標を立てて取り組み、達成感を味わうことができた。全校で取り組む課題が共有され、分かりやすかった。学年によっては、練習日程が十分に取れず、達成感に繋がらないところもあった。	B	
	養護教諭、栄養教諭、医師などと連携を図り、保健学習、食育などの充実を図る	保健学習や命の授業、薬育、食育など充実して行うことができた。養護教諭や医師と情報共有することで、配慮を要する児童の実態把握や今後の対応について確認することができた。	A	
③	学校や日常生活で、安心して安全に生活することができる	学校では安全・安心な生活ができていると感じる児童や保護者が多く、毎月の安全指導や避難訓練、児童の観察・声かけなどを通して、安心・安全な環境づくりに努めている。	B	○ 多くの児童が安心して学校生活を送っているが、家庭ごとに安全・安心に対する意識に差があり、学校の取組を継続的に発信する必要がある。 → 自己肯定感の低さや学校に滞在できる日数の少なさなど、個別の課題にも丁寧に対応することが求められる。また、きまりや安全に関する理解を深めるため、保護者にも丁寧な説明や情報提供を行い、警察・消防との連携行事などを活用して全体の意識向上を図ることが重要である。
	警察署や外部機関と連携し、安全点検、安全教室・避難訓練などの実施、学校や家庭ルールの徹底を図る	消防署や警察署と連携し、交通安全指導や消火器訓練、不審者訓練などを行うことで、自分の身の守り方を身につけることができた。生活指導だよりや長期休業前のお便りなどから、児童や家庭が意識して取り組めることを具体的に示すことができた。	B	
	アレルギー研修、チェック体制、危機対応の確立を確実に進める	アレルギー研修を教職員全体で実施し、共有したことで、危機管理を高めることができた。また研修や行事ごとに配慮児童について共通理解が図れた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		○「いじめ」という人権侵害の防止を徹底し、差異を認め合える人権教育を推進する ○いじめの早期発見や対応、組織的な解決に努める ○保護者、家庭と連携を密にするとともに、地域、教育委員会や関係諸機関とも協同して解決に当たる		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	本校のテーマ「自分も大事 友達も大事 認め合い」が100%の児童に浸透している	「自分も大事 友達も大事 認め合い」の合言葉は多くの児童に浸透しているが、全児童が実際の行動に移せているとは言い難く、100%の達成には課題が残る。	B	○ 人権学習や日々の授業を通してテーマの浸透を図っているが、「自分も大事 友達も大事 認め合い」の言葉の意味理解が不十分な児童もおり、100%の浸透には課題がある。他者を大切にすること意識の低さも一部で見られる。 → 人権ジャーや委員会活動、代表委員会、朝会など多様な場での継続的な周知が必要である。学級での合言葉にしていくことや教員間の共通理解も図りながら、具体的な言動を通して「認め合い」の実践を促していく。
	「人権DAY」(月1回)では、人権感覚を育てる指導や活動を行う	人権ジャーや委員会の取組と結び付けて指導ができた。毎月の「人権DAY」の取組が十分できなかった時もあった。	B	
②	生活アンケートで「学校が楽しい」かつ「友達と仲良くしている」と答える児童が90%以上いる	多くの児童が学校生活を楽しく感じ、友達と仲良く過ごしているが、低学年や高学年で肯定率に差があり、一部の児童には個別対応が必要である。全体としては90%達成に近づいている。	B	○ 児童の多くは友達との関係に安心感を持っているが、学習面や学校生活への不安を抱える児童もおり、特に低学年や内面に不安を抱えやすい高学年への対応が課題となっている。 → NiCoLiやデイケン等のアンケートを活用し、小さな変化にも気づくよう努めるとともに、教員が日々の観察と声掛けを重ね、児童理解を深める必要がある。また、幼保小連携の架橋研を継続し、第1学年のスムーズな接続と学びの充実を推進していく必要がある。
	アンケートなどの結果に基づき、面談や聞き取りなどにより早期発見に努める	アンケートの聞き取りによって、児童の問題が早期に発見でき、解決につなげることができた。	A	
	状況把握、児童理解に努め、全教職員、保護者と協力し、問題解決に当たる	学年会や学年間を通して状況把握をしたり、生活指導夕会で共有したりすることで、全教職員が意識を高めることができた。また、ケース会議や校内委員会で保護者やスクールカウンセラーと共通認識をもち、問題発見や問題解決につなげることができた。	A	
③	いじめの未然防止、早期発見に努め、いじめゼロを目指し、適切に組織的に対応する	日々の観察やアンケート、会議を通して情報共有と早期発見に努め、いじめには管理職を含めた組織的な対応が行われている。ただし、いじめゼロの達成には至っていない。	A	○ 児童理解を深め、いじめの未然防止や早期発見に努める姿勢が定着してきている。限られた時間の中でも、学級担任や支援員との情報共有を通して児童の様子を丁寧に把握してきた。いじめアンケートや校内支援委員会などの取組も有効に活用されている。 → 「些細なことでも認知し、見守る」という視点を大切にしながら、組織的に情報を共有し、早期対応を継続していく。
	学年会(週1回)や校内支援委員会(月1回以上)を実施し、些細なことでも見逃さない	週に1回の学年会、校内支援委員会を定期的に行うことができた。管理職も含め、学年を越えて職員間の情報共有がしっかりとできたため、初期段階で対応ができた。	A	
	温かな学級風土、児童・保護者との信頼関係づくりに努める	全職員が保護者との信頼関係づくりに努めることができた。児童が互いのよさを認め合えるような取組を行ったことで、よりよい人間関係を構築し、そのことが保護者との信頼関係につながった。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目5 地域や近隣幼稚園・保育園との連携に関すること

重点目標					
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策	
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明			
		○台場幼稚園・保育園と連携して作成する「幼保小架け橋プログラム(スタートカリキュラム)」をとおして、幼児期に育まれた力を最大限に発揮し、目標達成を諦めない力や自制心を育み、主体的・対話的な深い学びの実現を目指す。 ○地域の伝統文化に積極的に参加することで、郷土や日本の伝統文化に誇りをもたせる。			
①	保幼小一体教育の実現に向け、就学前における地域の子どもたちを児童・教職員との交流を通して育成する	4・4交流や5・5交流、架橋研究、行事等を通して、園児と児童・教職員の継続的な交流が実現されており、就学前の子どもたちの発達理解と支援の共通認識が深まっている。	A	○ 幼保小の交流は今までの積み重ねによって持続性が保たれており、スムーズな交流を図ることができている。未就学児と交流することで児童の思いやりの心情を育てることができている。架け橋プログラムについて保幼小で検討するときには、それぞれの指導観の違い等によって検討に時間がかかった。 → 架け橋期の発達段階について共通理解を図っていくことで、同じ視点で手立てを考えていけるようにしていく。	
	のびっこ園台場(台場幼稚園・台場保育園)・ハツ山保育園の園児と、10回の5・5交流、4回の4・4交流、3回の3・3交流を通して思いやりの心情を育てる	交流が計画的に実施され、児童と園児の関わりが豊かになされていた。交流日以外の日や交流後にも自然に関わろうとする態度が育った。継続して行うことで、下級生にとって、上級生の姿が将来の自分の目標になっている。	A		
	校内研究に台場幼稚園および台場保育園の教職員が参加し、円滑な接続に向け、「幼保小架け橋プログラム」を作成する。	保幼小連携の一環として交流が深まり、円滑な接続に向けての取組がすすんだ。	A		
②	地域行事に関心をもち、参加することを通して、地域を理解し、連携を深める	地域行事への関心を高めるため、行事の精選や広報に工夫を重ねている。教員の勤務時間の制約も考慮しつつ、無理のない範囲で参加や連携を図り、地域との信頼関係づくりに努めている。	B	○ 教員の地域行事への参加を通して、児童の地域行事への関心が向上したり、保護者や地域との信頼関係を築いたりするきっかけとなった。 → 行事の精選を行い、残された行事をより充実させるとともに、行事の前後に広報活動を行うことで、児童・保護者・地域の関心をさらに高めていく。無理のない範囲で、地域との連携や理解を深めていく姿勢を大切にしていく。	
	品川第一地区まつり(4-6年)、品川蕪品評会(2年)、ふる里かるた大会(1-6年)に児童が参加する	ゲストティーチャーを招いて品川蕪を育てる取組、ふる里かるたへの取組などを通して、校内全体で、関心や意欲が高まった。	B		
	品川・荏原神社祭礼、しながわ宿場まつり、東海道駅伝等に教員が参加する	全教員の参加はできなかったが、保護者や地域との信頼関係を深めたり、児童の頑張りや成果を認めたりするよい機会になった。	B		

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成